

『降りていこう』（作品社）附録解説

南へ降って沼地の中へ

——新たなるジェズミン・ウォード

青木耕平

*本稿は、ジェズミン・ウォード『降りていこう』（Jesmyn Ward, *Let Us Descend*, 2023）を読み解く一助となるべく書かれた解説であり、物語内容に多少踏み込みはするが、その全容や結末を明かすことはしない。

『降りていこう』の主人公アニスが、私にこう教えてくれた——「大きな喪失に押し潰されて、
る時でさえ、希望は残っている。悲しみを生き抜くことで、新たな人生へと続く道を、あなた
は見つけることができる」

——刊行後インタビュー「ジェスミン・ウオード、創作の源泉を語る」より

『降りていこう』は、二〇二三年秋に刊行された、ジェスミン・ウオードによる四作目の長編小説である。舞台は一九世紀初頭、黒人たちが奴隷制に苦しめられていたアメリカ南部であり、物語はサウス・カロライナより幕を開ける——つまり、本書はウオードの創作世界の完全なる新機軸である。

二〇〇八年のデビュー作『線が血を流すところ』から始まり、二〇一一年の第二作『骨を引き上げろ』、二〇一七年の第三長編『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』に至るまで、ジェスミン・ウオードの小説世界は三作すべて同時代の二一世紀アメリカに設定されていた。物語の舞台はすべて、ウオードの故郷ミシシッピ州デリルをモデルとする架空の街ボア・ソバージュだった。第二作目と第三作目の間、二〇一三年に発表されたノンフィクション『私たちが刈り取った男たち』もまた、デリルで暮らし無念にも早逝した若い男たちとの回想録だった。

『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』邦訳版の附録解説に、「二〇一〇年代のアメリカ文学は、ジェスミン・ウオードを抜きにして語ることはできない」と記したが、二〇二四年に発表され大きな話題を

呼んだ「ニューヨーク・タイムズ」が選ぶ二一世紀のベスト書籍一〇〇冊」において、ウオードが二〇一〇年代に発表した単著の三冊すべてが選ばれた（当該リストに三作ランクインをしたアメリカ人作家はジョージ・ソーンダースとウオードだけである）。現代アメリカを、現代のミシシッピを舞台に小説を書かせたらウオードの右に出る作家はいない——そのようなコンセンサスが形成され、ボア・ソバージュ・サーガの続きが待たれる中、本作『降りていこう』でウオードは二〇〇年の時をさかのぼった。

本書タイトル「降りていこう」は、ダンテ『神曲』第一巻「地獄篇」より取られている。『神曲』では、人生の岐路に立ち深い森の中をさまよう三五歳のダンテの前に古代ローマの詩人ウエルギリウスが現れる。ウエルギリウスはダンテの魂を救うため、導き手となって地獄へと降りていく。

対して本書『降りていこう』の主人公は、若き黒人奴隷の女性アニスだ。アニスの母親もまた黒人奴隷であり、サウス・カロライナの農園で労働に従事している。アニスの生物学的な父は、その農園の白人領主である。アニスは、領主が母親をレイプしたことで産まれた子供なのだ。ある日、その白人領主が母を奴隷商人に売り飛ばす。失意の日々が続き、やつと新しい安らぎを始めたとき、アニス本人も売り飛ばされてしまう。ニューオーリンズにある奴隷市場を目指し、黒人奴隷にとつての生き地獄である南部をアニスはさらに降りていく。その最中、とある者が現れ、ダンテにとつてのウエルギリウスのごとく、彼女を救う導き手になろうと買って出る——。

ここまでが、全一三章ある本作の第三章までの概略となる。

『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』刊行後のインタビューで、ウオードはメディア各所に次回作は一八〇〇年代初頭を時代背景とした奴隷制をめぐるものになると構想を語り、また、作品の舞台となる

歴史的側面を調べるのに時間がかかるだろう、と発言している。そして実際、刊行後のインタビューでは「よし、もう書き始めてもいいだろう、と自分自身が納得するまで、調査に二年以上をかけた」と述べている。

しかし、そのようにして『降りていこう』を書き始めたウォードに、大きな悲しみが襲いかかった。結果として、構想から刊行まで、実に六年の歳月が費やされた。刊行までの六年間、ウォードは本作へと結実する重要な三つの文章を発表している。本解説は、その三つのテキストと、ウォードを襲った悲劇を紹介することから始めたい。



二〇一九年、「二六一九年プロジェクト」——掌編「南に売られる」

二〇一九年八月、「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」誌上で、ニコル・ハンナ・ジョーンズというジャーナリストが「二六一九年プロジェクト」を開始した。このプロジェクトの主眼は、アメリカ合衆国における奴隷制の歴史・語りを補足／訂正しよう、というものであった。ジョーンズは、このプロジェクトが掲げる「二六一九年」の意味をこう明かす。

一六一九年八月下旬、イギリス植民地ヴァージニアに、アフリカから連行され奴隷とされた二〇から三〇名の人々を積んだ船が到着した。彼らの到着こそが、人類史上に例のないアメリカの野蛮な奴隷制度の始まりであり、それは二五〇年間続くこととなる。これをアメリカの原罪と呼ぶ人々もいるが、それ以上のものだ。これこそが、アメリカとは何かを今も形作る源だ。

アメリカ国内だけでなく、ここ日本や他の多くの国々においても、イギリスからやってきたビルダリム・ファアザーズと呼ばれる清教徒たちがアメリカ合衆国に到着した「一六二〇年」こそがアメリカ史において最初の重要な年号だ、と教育の場で教え込まれる。しかし、それは白人中心主義・西欧中心史観に過ぎない。むしろ、激しい人種差別が今もお渦巻くアメリカ合衆国において重要なのは、史上初めてアフリカ大陸より黒人奴隷が強制連行されてきた一六一九年である——。これは、支配者たちが書き逃してきた歴史を、被支配者たちが書き足して訂正を迫る、力強いプロジェクトである。プロジェクトは大変な反響を呼び、翌二〇二〇年、ジョーンズにピューリッツァー賞が与えられた。

この巨大なプロジェクトはジョーンズ一人が行なったものでは当然ない。ジョーンズの企図に賛同する五〇名以上の著者が参加し、「ニューヨーク・タイムズ」「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」上で定期的に文章が発表された。二〇二一年に書籍としてまとめられた本プロジェクトは実に六〇〇頁近い大著で、主に歴史家やジャーナリストが見過ごされてきた史実を拾い上げて新たなアメリカ史を提示するのだが、芸術家たちも多く参加して、「二六一九年」のような含意を持ち、アメリカ史にとって重要でありながらも語られずにきた年号にふさわしい詩やエッセイ、フィクションを寄稿している。

このプロジェクトにウォードも参加している。ウォードに任された年号は「一八〇八年」だ。アメリカ史における一八〇八年、それは、大西洋をはじめとした国外からの奴隷貿易を廃止する法律が施行された、奴隷制の転換点となる重要な年である。アフリカ大陸から大海原（オセアニア)を渡り黒人を連行する奴隷貿易は、確かに一八〇八年に終わった。しかし、奴隷制は終わらなかった。法の目を欺いた（あざむ）より非

人道的な国外からの奴隷輸送は後を絶たなかった。そして何よりも、この一八〇八年を転機として、すでにアメリカ国内にいた黒人奴隷たちはより過酷な現実と直面することとなった——国内における奴隷の売買が激化したのである。奴隷は主に、サトウキビや綿花農園の労働力として、より人種差別の激しい南部へと売られることとなる。

そんな一八〇八年を舞台とし、ウォードは「南に売られる (Sold South)」という二頁の掌編を寄稿している。掌編の初出は二〇一九年八月三日付のニューヨーク・タイムズのポッドキャストであり、ウォード本人が全編朗読を行なっている。プロジェクトの持つ公共性の観点からこのポッドキャストは全編無料公開され、スクリプトもオンラインで全文閲覧可能である。以下、一部を引用する(引用文における「…」は中略を意味します)。

そのささやきは、氾濫する川のように宿舎を駆け巡った。夜は寢床で、昼は井戸のそばで、畑では田を耕しながら、私たちは聞いた話を伝えあつた。彼らはもう、水の上から私たちを盗まな^{たやす}い。「…」母親たち、父親たち、姉妹たち、兄弟たちは無事に残つたし、これまで盗まれなかつたし、これからも盗まれることはないだろう。そう想像するのは容易かつた。しかし、それは愚かなことだつた。のちに最初のジョージアマンがやってきて私たちをロープで捕らえたとき、そう思い知らされた。

ジョージアマンたちは朝の水を飲みに行く少女をつかまえた。厩舎に走っていく少年をさらつた。「…」彼らはいつも夜明け前に、南へ売るため私たちを迎えに来た。私たちはそれがどのようなものなのか理解できず、パニックをおこし、詮索し、泣き声をあげ、命乞いをし、果てしなく叫んだ「…」私たちを所有する者たち、私たちを売つた者たちは、それに耳を貸さなかつた。「…」行進が進むほどに暑さが増した。ロープが食い込み皮膚が伸びた。筋肉が溶けてなくなり脂肪は骨となった。土地は低湿地へと転がり、その中央にニューオーリンズという街があつた。私たちが死者の町に着くと、彼らは私たちを奴隷市場^{スレーブ・マーケット}に入れた。「…」私たちを売りやすくするため自分自身について嘘をつかされた。お針子か鍛冶屋か女中かと聞かれたら、「はい」と答えると言われた「…」新しい死と過去の生がトレードされた。

このわずかに二頁ほどの掌編に、すでに『降りていこう』の原型がある。「ジョージアマン」とは、当時の奴隷たちが実際に使用した隠語で、サトウキビや綿花農場のあるジョージアへと奴隷を売り捌^ばく者たちを意味し、『降りていこう』にも登場する。二〇一九年の時点で、ウォードが『降りていこう』執筆に精力的に取り掛かっていたことが、この掌編からもうかがえる。

しかし、翌二〇二〇年、悲劇がウォード一家を襲い、彼女のペンを持つ腕が止まる。

❖ 二〇二〇年、「息ができない」——エッセイ「目の当たりにすること、絶望から立ち上がること」

二〇一七年発表の第三長編『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』の中には、「息ができない (I can't breathe)」という表現が六度登場した。一三歳の黒人少年ジョジョの口から三度、その若き母親であるレオニからも三度。母は、息子は、対人で緊張した場面で息がつまる。もしくは、愛されたいと痛切に求めるあまり、息ができなくなる。そして、無惨な最期を遂げた黒人少年リッチーもまた、「息

が苦しい (hardly breathe)」と訴える。

二〇一四年、アフリカ系アメリカ人であるエリック・ガーナー氏が死亡した。ガーナー氏は白人警官に尋問され、警察は禁じられているはずの締め技を彼に使用した。ガーナー氏は「息ができない」と繰り返し述べ、そして、亡くなった。彼が白人警官に理不尽に捕縛され絞め落とされ失神する瞬間を、ガーナーの友人が撮影していた。動画はインターネット上に回り、すでに熾^せついていたブラック・ライヴズ・マター運動の火は拡大し、「息ができない」は黒人に対して行なわれる白人警官の差別的な暴力に抗議するスローガンとなった。

そして二〇二〇年五月、ジョージ・フロイド氏殺害事件が起こった。これにより、ブラック・ライヴズ・マター運動がアメリカのみならず世界中で大きく報道されることとなった。コンクリートの地面に横たわる黒人男性フロイド氏の首筋に膝を立て抑えつける白人警官の冷酷な姿は、アメリカ国内で人種差別が終わっていないことを世界中に知らしめることとなった。ジョージ・フロイド氏もまた、その動画の中で何度も「息ができない」と繰り返し訴えていた。

二〇二〇年当時、フロイド氏の窒息死をテレビやスマートフォン画面越しに眺めていた私たちの口元は、マスクや布で覆われていたはずだ。二〇二〇年、それは、Covid-19の世界的パンデミックが始まった年だった。

二〇二〇年九月、雑誌「ヴァニティ・フェア」にウォードはエッセイを寄稿する。「目の当たりにすること、絶望から立ち上がること——パンデミック後の個人的悲劇」と題されたエッセイは雑誌公式HPに全文無料で掲載され、世界中で大きな反響を呼んだ。ここに冒頭パラグラフの抜粋を訳出する。

私の最愛^{ビラヴド}の人が一月に亡くなった。私より一回り背が高く、大きくて美しい黒い瞳と、器用で優しい手を持っていた。「…」私たちの子供が生まれたとき、一人目のときも二人目のときも、彼は涙を流しながら黙って泣いていた。「…」我が家での彼の主な仕事は、私たちを支えること、子供たちの面倒を見ることが、主夫であることだった。彼は出張によく同行し、講演会場の後ろに子供たちを座らせ、私が聴衆の前で話をしたり、読者に会って握手やサインをしたりするのを静かに誇らしげに見守っていた。「…」世界で一番好きな場所のひとつは、彼の隣だった。深く暗い川の水の色をした、彼の温かい腕の中だった。

二〇二〇年一月、それは、まだ世界がコロナウィルスの脅威を正確に認識する以前であり、ジョージ・フロイド氏の事件より前のことであつた。この後に続くエッセイで、彼女の最愛の人の死因は突如の呼吸困難であり、病床で何度も「息ができない」と彼が苦しみながら呟^{つぶや}くの聞いたことを明かしている。

それまでのウォードの人生において、悲しみと喪失の象徴は、十九歳で亡くなった最愛の弟・ジョシュアだった。『線が血を流すところ』の邦訳解説で詳述したように、ウォードは『線が血を流すところ』『骨を引き上げろ』『私たちが刈り取った男たち』と、最初の単著三冊すべてを弟・ジョシュアに捧げている。『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』の献辞にあるのは母親の名前だけだったが、本書『降りていこう』は再びジョシュアへと捧げられている。そしてもう一人、『降りていこう』の献辞にジョシュアよりも先に名が置かれた「ブランドン」こそが、亡くなった最愛^{ビラヴド}の人だ。ウォードの人生

は、愛しい人の死を目の当たりにする人生であった。

しかし彼女の人生は、その絶望から立ち上がる人生でもある。エッセイのなかで、ブランドンの死から数カ月後、ウォードは失意の底で本作『降りていこう』に取り組んでいることを明かしている。

パンデミックが日常となり拡大するにつれて、朝早く起きるために私は目覚ましをセットし、眠ることのできた夜の翌朝には時間通りに起きて、執筆中の小説に取り組んだ。この小説は、私よりもさらに悲しみにとらわれている女性奴隷、母親を奪われてニューオーリンズに売られ、恋人を奪われて南部に売られ、自分自身も南部に売られ、一八〇〇年代半ばの奴隷制の地獄に落ちていく女性の話である……パンデミックの中にあっても、悲しみの中にあっても、私は、死者の船から私の船へ、時間という名の海の上で歌いかけてくる死者の声を増幅するように命じられ、それに従事している自分自身に気づいた。

最愛のパートナーにして子供たちの父親を突如失う、それも息ができずに苦しみ悶える姿を看取りながら——私のような俗人にはこれ以上の悲しみは想像できない。しかし実際にその悲しみを経験したウォードは、それ以上に辛い女性を想像し創造した——彼女こそが『降りていこう』の主人公アニスである。

アニスはまた『降りていこう』の語り手でもある。一人称の語りの多くが現在形であり、物語の進行とアニスの南部への連行とが同期する本作は、ウォード全作中で最も高い緊張感に満ちている。その中で、アニスは何度も「息ができない」状態になる。アニスもまた、最愛の人との別れを経験する。

しかし、アニスはそこから何度も立ち上がる。アニスと著者はシンクロし、ウォードはブランドンの死から立ち上がり、『降りていこう』は完成した。

＊次節より『降りていこう』後半部の内容に触れます。未読の方はご注意ください。

二〇二二年、逃亡奴隷の新たなナラティブ——短編小説「母なる沼地」

ブランドンとジョシュアへの献辞の次頁に置かれているのは、三つのエピソードである。その第一のものは、実際に奴隷制を体験した黒人のインタビュからの抜粋である。奴隷制を実際に経験した黒人が自らの経験を語ったり綴ったりしたものを「奴隷体験記」と呼ぶ。また、そのスレイヴ・ナラティブを参照項とし、フィクションの想像力によって再創造された黒人奴隷を語り手とする小説を「ネオ・スレイヴ・ナラティブ」と呼ぶ。それらの作品には、ウィリアム・スタイロン『ナット・ターナーの告白』、エドワード・P・ジョーンズ『地図になかった世界』、トニ・モリスン『ピラヴド』などがある。そして近年、このジャンルで最も成功した小説に、コルソン・ホワイットヘッドが二〇一六年に刊行した『地下鉄道』がある。

二〇一〇年代の黒人アメリカ文学の最重要作家がウォードであったことに異論がないように、二〇一〇年代の黒人アメリカ文学の最重要作品がホワイットヘッド『地下鉄道』であることにもまた異論はないだろう。ウォード自身、『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』刊行直後の「タイムズ文藝付録」誌によるインタビューで、「百年後も読まれているだろう同時代の作家は？」という質問にホワイットヘ

ツドの名前を真つ先にあげ、また「もつとも嫌いなフィクションの登場人物は？」という問いに対し、「最近読んだものでいえば『地下鉄道』のリッジウエイ。容赦のない悪者でありつつ、信じられないくらい生き生きとしている」と答えるなど、ホワイトヘッドへの敬意と『地下鉄道』への賛辞を明らかにしている。

歴史的事実としての「地下鉄道」とは、奴隷制の南部から自由州の北部までの逃亡経路の隠語であり、奴隷制廃止論者や実際に逃亡を手助けした人々の間での合言葉となったフレーズだった。これに対しホワイトヘッドは「もし地下鉄道が文字通りに実際あったとしたら？」という架空の設定で小説世界を作り上げた。つまり、従来のネオ・スレイヴ・ナラティブに「逃亡奴隷の語り」をして「架空の設定」を加えたのである。そして、『降りていこう』はまさに『地下鉄道』以降の小説となっている。

二〇二二年、AmazonのKindle限定配信で、ウォードは短編小説「母なる沼地 (Mother Swamp)」を発表した。紙の書籍に換算すれば三〇頁弱の短いものであるが、この短編は『降りていこう』と強く響き合い、相互に補完するもので、簡単な概略を記したい。

物語の主人公はアフィセという名の一七歳の少女。アフィセは、とある沼地に作り上げられた女性だけのコミュニティの第九世代に当たる子孫である。物語はそのコミュニティが如何に作られ持続させられてきたかを、祖先たちの辿った足跡を逆回しするように進む。コミュニティの第一世代の母は、逃亡奴隷であった。命懸けの逃避行の末、彼女は身を落ち着かせることのできる沼地を見つけ、そこで身籠もつていた子供を産む。その子供が第二世代の母である。彼女は大人になると同じく男だけの逃亡奴隷のコミュニティに出かけ、子を身籠もつて、それが女性であった場合は自分のコミュニティ

ティに、男性だった場合は相手のコミュニティに預ける。そのようにして、このコミュニティは維持されてきたが、第八世代の母とその娘アフィセの時代に存続の危機に陥る。外部へと旅立つたアフィセの目に映るアメリカでは、どうやら奴隷制は終わっている――。

ウォードは本作に対し「著者註解」を末尾に記している。それが見事にそのまま『降りていこう』の解説となっており、一部を引用したい。

執筆中の長編小説のため、アメリカの奴隷制に関する多くの書籍を読んだ。その中の一冊、シルヴィエン・A・ディアフ『奴隷制からの亡命者たち――アメリカ逃亡奴隷の物語』に大きな影響を受けた。それは、アメリカの奴隷制から逃げ出し、その後も生き抜いてきた人々の話だった。『……』逃亡奴隷が築いたコミュニティで、アメリカで最も有名なものは、デイズマル大湿地――ヴァージニア州南部からノースカロライナ州北東部に広がる沼地――に形成された逃亡奴隷の集落だ。最も悪名高いのはセント・マロと呼ばれたフィリピン系アメリカ人の漁村で、そこには男性しかいなかった〔……〕。私はこう想像した。もし荒野にマルーンの入植地が他にもつとあったとしたら？ そのコミュニティの始まりが一人の逃亡奴隷の女性だとしたら？ 彼女はどのように家族やコミュニティを築いたのだろうか？ 男性だけのセント・マロと対をなすような、女性だけの集落があったとしたらどのようなものだった？

デイズマル大湿地、漁村セント・マロ、女性だけに代々受け継がれる知識、女性だけの集落の祖となる一人の逃亡奴隷と、その腹の中の子供――。この短編に詰め込まれたエッセンスを滋養として、

長編小説『降りていこう』は大きく展開することとなる。

ウオードが「多くの本を読み調べた」と書いているように、この逃亡奴隷たちの作り上げたコミュニティについての調査研究は、ここ一〇年で飛躍的に蓄積が増え、今も精力的に行なわれている最中である。この学問調査自体が、「奴隷制の南部からは逃げるしかない。自由な北部に行くしかない」といった既存の逃亡奴隷の語りそれ自体への変化を促している点に注意されたい。

実際の「地下鉄道」は南部で苦しむ奴隷たちに対して大きな役割を果たした。その重要さは強調してもし過ぎることはない。しかし同時に、北部が南部を救ったという歴史観、北部の進歩的な白人たちに寄りかかる物語だけではなく、南部の黒人が自分たちで自由を獲得した側面にも光を当てようとする動きが近年起こっている。これは先述した「一六一九年プロジェクト」と地続きだ。このようなアメリカ史、逃亡奴隷史をめぐる大きな潮流の変化の中で、現代の黒人作家を代表するジェスミン・ウオードが『降りていこう』を書いたことの意義というのは、とてつもなく大きい。

*次節より『降りていこう』の核心部に触れます。未読の方はお引き返しください！



『降りていこう』——地獄めぐりの信頼できない導き手

本書をすでに読み終えた読者ならば、本稿でここまで紹介した三つの先行テキストが、いかに強く『降りていこう』と結びついており、そのまま作品全体の解説となっているかがお分かりいただけたと思う。しかし、あまりにも多くの謎がまだ残っている。受け取り与える者たち、とは何か。記憶す

る者、とは誰か。農園の女主人は何者で、女主人の夫の遺体はなぜ腐乱するまで放置されたのか。父をどう捉えるのか。サファイとの性愛関係は何を意味するのか。そして何より、精霊アザとは何者だったのか——？

本作を書くにあたりウオードが史実のリサーチを積み重ねてきたのは記したとおりだ。たとえば「アザ母さん」について、モデルとなった黒人女戦士部隊が西アフリカのダホメ王国に実在したことがすでに海外の書評で指摘されている。対して、精霊アザの存在はあまりに謎めいており、「ニユーヨーク・タイムズ」さえもが「精霊アザは、アニスにとつてだけでなく、プロットにとつても必要な存在だ」と述べている。精霊アザに対し、一つの仮説を提示して本解説を閉じたい。

精霊アザは、実際のアメリカ史に根拠を求められない以上、「超歴史的なもの」である。しかし、それは同時に、アフリカン・アメリカン文学の伝統に根差したものだ。『歌え』に登場したジョジョの祖母にしてレオニの母である「母さん」はヴードゥー文化・スピリチュアリズムの担い手であったし、そのような南部黒人の伝統は、ウオードが敬愛してやまないゾラ・ニール・ハーストン由来のものであった。また、「元・奴隷の語り」「姿形を変える」といった精霊アザの設定は、アフリカン・アメリカンの小説家にしてアクティヴィストであったチャールズ・W・チエスナット『魔法使いの女 (Conjure Woman)』まで系譜を辿ることができる。また、今作における「女性の物語」への拘りはアリス・ウォーカーを、そして言うまでもなく奴隷制により引き裂かれてもお続く強烈な母娘関係はトニ・モリスンから引き継いだものだ。

ではなぜ、このような黒人文学の伝統を『降りていこう』は必要としたのか。それは、奴隷制というあまりに大きい負の歴史に対抗するために他ならない。問うべきなのは精霊アザの曖昧さではなく、

アニスの決然とした意志の強さである。ではなぜアニスはここまで強い主体性を持つ必要があったのか。それは言うまでもなくパンデミックで顕^{あら}わになった黒人差別に抗^{あらが}うため、ジョージ・フロイド氏の死を見て怯^{おび}えた黒人の子供たちに希望を送るためだ。

小説の結末で、アニスが留まることを選択した場所は、展開から考えて、ニューオーリーonzの農園からさほど遠くない。それはつまり、ボア・ソバージュからもまた遠くない、ということの意味する。刊行後のインタビューで本作とボア・ソバージュ三部作との関係について問われたウォードは、途切れることなく続く重要な何かが間違いないと語った。奴隷の祖先を持つ黒人女性が、南部に留まって生きる、その意味と覚悟。

ジェスミン・ウォードの新たな一章。悲しみから立ち上がった作家の言葉は、強くて重い。

青木耕平（アメリカ文学、愛知県立大学講師）

謝辞…本稿を執筆するにあたり、九州工業大学講師の松田卓也氏より多大なるアドバイスをいただいた。松田氏の助言がなければ本解説を書き上げることはできなかった。ここに記し、深く感謝する。